

ひざが笑うはなし

浅海重夫

この春、ある高校生のグループと一緒に、残雪ゆたかな北アルプスの1峰鹿島槍ヶ岳に登頂した。私は職業がらいつまでもとしをとらずに若い気でいるが、1924年生れの身体がはたして若い連中と同じ行動にたえられるかどうか、試してみたいことが登山に参加する動機の1つであった。結論は、登路では今までと全く変りなし、ところが下降路で意外に調子が狂ってしまった。いわゆるひざが笑うという現象で、若い頃なら加速度をつけて一気に走り降りるところを、登りより倍も時間がかかるじれったさ。それも1度ガクンとひざをやってから、恐怖心がつきまとい、ここで事故を起したら迷惑もかけるし、とにかく警戒にしくはないと専ら安全運転で、一行のはるかあとからゆっくりとひとり降りてきた。疲労はないので重い荷物が苦になっただけではない。そのかわり今咲きそめた石楠花、満開のこぶしや山つつじに目を向け、ハイマツの尾根ではさかんな雷鳥のランデブーにカメラを向ける心の余裕が、昔なら思いも及ばないほど拡張されたことを自覚した。大冷沢の厚い礫層を切る段丘面も、馬車馬のように山をかけ上りかけ下った大学生の時分には目に入らなかっただろう。平生の運動不足、とくに規則的な四肢の鍛錬に欠ける生活が1つの原因であろうが、あのくらの降り路で恐怖を感じ、警戒心を誘発させられたのはまさに年令の故であろう。ちなみにこれまで私が経験した比高2,000m以上の登山と比高累計は表の通りである。

1	1940年 富士山	2810m	12	1950年 槍・奥穂	3430m
2	1942 奥穂・前穂等(合宿)	4885	13	1954 ※常念越え洞沢入り	2930
3	" 鳳凰越え北岳	5365	14	" ※木曾駒岳	2510
4	" 万座・渋峠(スキー合宿)	2545	15	1955 ※仙人越え立山	2695
5	1943 巻機山・七つ小屋山	2860	16	1956 ※鳥帽子・槍縦走	3270
6	" 魚沼三山縦走	2780	17	1959 木曾駒岳	2240
7	" 白馬鍾・唐松岳縦走	2535	18	1960 ※槍ヶ岳	2100
8	" 槍ヶ岳	2315	19	1964 仙丈岳	2760
9	1946 針ノ木越え立山	3550	20	1967 鹿島槍岳	2080
10	1948 白馬岳	2240			
11	" 燕岳	2180			

※印はお茶大卒業生諸姉と共に登ったもの

この記録をたどってなお気づいたのだが、1964年までは2,000m以下の登山を入れれば毎

年1回以上はやっていたのに、それ以後の3年間は全く山登りをしていなかった。これでは心身ともに老化するはずだというのがいつわりのない結論。今後はどうするか、自分としては可能な限りチャンスをとらえて、毎年1回は1,000~2,000m程度の登行をつづきたい。息子も高校生になったのだし、一緒に登る折もあるだろう。少くとも登りだけはまだ負けないつもりでいる。

山の調査と車道

式 正 英

昨年の夏から秋にかけて新潟県清津川流域の地形調査に3回足を運んだ。山地の調査は昭和31年に終えた早川流域(赤石山地)以来10年間の空白があった。登山は学生時代から始め、その後は仕事にかこつけて毎年連続してきていたが、調査の対象が低地に移ると共に、山らしい所を歩くことから遠ざかっていた。久しぶりの山旅は、自らの体力が衰え、交通路線の開発に伴う山地景観の変化が著しいことを思い知らせた。

清津川へは群馬県月夜野から三国峠を経てはいるのが近い。三国峠に車道を通じたのが6年前、舗装が完成したのが2年前である。峠から降って浅貝の宿に至ると前面が忽然と開けて苗場国際スキー場の大舞台があらわれる。道路はその先、浅貝川の右岸山腹を斜めに登って火打峠に至るが、この付近、谷床の緑の平地とその間に縫いこまれた白く光る網状の水流、筈山下部の緩やかな山腹と豪雪地帯特有の濃緑、斜面下部の崖線の整列、それ等が組合わさって野性的、近代的な美景を呈している。これが最近カレンダー写真でみたおそらくチロル、アルプスであろうズーデン峠の風景とひどく似ているのだ。アルプスのは氷蝕谷、清津川上流は裂罅谷起源の縦谷と成因の差はあるものの、近代的車道を配した山腹と幅広い谷床、それに展望の角度の偶然的一致が類似性の原因になっていると思われる。

早川上流の野呂川流域でも昭和30年頃夜叉神峠をトンネルが抜け、その後広河原に達した野呂川林道と、一方西山温泉から蝮平、更に上流にのびた電源開発道路とが接続(昭和36年頃)して、座したままで、鷲住山などの比高1,000m以上の長大な急斜面をほしのままにすることができるようになった。蝮平や広河原に達するまでも、つい此の間までは歩き始めてから優にまる1日を要した。それも登るほど頂稜が退いていくように錯覚される南ア独特の急斜面にふりまわされた挙句のことである。その様な時の自然は圧しつぶさんばかりの威迫を示すものであるが、車窓からのぞむ自然は同じ巨大さでもすでに整頓された立たずまいである。人間が自然の懐ろにわけいてその神秘のヴェールをはいだ結果は、馴らされた形の中におさまってしまう。風光は車道によって開発されるが、自然の粗野は優美へと変わるようである。